

Viator

VOL.004



Merry Christmas

主任司祭 イブ ボアベール

クリスマスおめでとうございます。

クリスマスって何でしょうか？パーティ？プレゼント？街にはイルミネーションの光があふれています。そう、世の光、イエスが人間としてこの世に生まれ、世界を照らし輝く神秘の出発点です。そして、この世で唯一の、まことのプレゼントの贈り主は神です。御ひとり子イエスを私たちにくださり、生きる希望、御父のもとに向かう使命をお与えくださったのです。

待降節に入ると、教会や家庭でクリスマスツリーや馬小屋を飾りますが、それにはどういう意味があるのでしょうか。まずツリーですが、一年中緑の葉をつける常緑樹を使うのは、それが永遠の命の象徴だからです。それに灯をともしのはもちろんキリストの光の意味で、ドイツで明かりをつけたろうそくをツリーに飾ったのが始まりとされています。ろうそく行列では一人一人が明かりをともし、皆がイエスを体現するものとなるのです。

また馬小屋を飾る習慣はアシジのフランシスコによって始められたといわれています。当時聖書の文字を読むことができたのは、司祭、医者、弁護士などごく限られた人々でした。そのため聖書を分かりやすく民衆に伝えるために、教会でスタンドグラスが用いられるようになったようですが、馬小屋の模型も、ご降誕の場面を印象的に伝える道具として使われたのでしょう。家庭でも馬小屋を飾るようになったのは、17世紀頃からといわれています。イエスの眠る飼い葉おけは、家畜のえさを置くところ、つまり命を養う場所という意味で、ご聖体を置く祭壇を表しています。私たち人間のために、ご自身を捧げつくってくださったキリストの祭壇です。

馬小屋には聖家族のほかに、羊飼い、三人の博士、そして動物が配されていますが、ロバは平和をもたらすものの象徴で、イエスもソロモンもエルサレム入城の時ロバに乗っていました。また牛は畑を耕す厳しい仕事をすることから苦難の象徴、そのくびきはキリストの十字架を表しています。

昔はクリスマスを12月25日から2月2日まで祝ったものでした。この40日間は四旬節の40日と対応するもので、イエスが誘惑を受けたのも40日、エリヤがホレブ山で断食したのも40日、モーセがシナイ山にこもったのも40日です。アダムとイブの誕生が紀元前4000年ですから、4000年救世主を待ち続けたことを4週間の待降節が表しています。

12月の21日から25日頃といえば、一年中で最も日が短く、暗く寒い時期です。かつてローマ帝国ではちょうどこの頃にローマの神々のための大きな祭りがありました。夜には灯を灯して街全体を明るくしたそうです。そして12月25日だけは特別に奴隷が主人の身分になることを許されていたそうです。この12月25日がイエス・キリストの誕生日だと定められたのは5世紀頃といわれています。25日頃を境にだんだん日はのびはじめ、世界に光があふれてきます。まさにキリストの光が世を照らしだすのです。私たち人間のためにご自身をお捧げくださったイエスによって、私たちはたった一日ではなく、永遠に罪から解放され、自由の身となったのです。まことの神でありながらその身分を決して利用せず、弱い一人の人間として歴史の中に現れてくださった主の御心を思い起こすには、ご降誕だけでなくご受難、ご復活にまで目を向けねばなりません。

クリスマスは言うまでもなく「キリストのミサ」ですが、実際のキリストのミサは最後の晩餐ただ一度だけです。私たちは主日ごとに、また様々な折にミサをおささげしますが、それはただ一度きり行われたキリストのミサと全く同じものです。クリスマスは決して単なる記念日などではありません。神はいつも現在形で私たちとともにいてくださるのです。能力のたかひは問題ではありません。神から頂いた力を使って他者に仕えるよう努力しましょう。たった5つのパンしか集められなかった弟子たちの手を使って、何千人をも満腹させたキリストが必ず助けてくださいます。イエスが弱い一人の人間として来られた時、人間はまことの人間となりました。主の再臨を待ち望む私たちが、主にならい従順に謙虚に神の大いなる目的のために働くことができますように。

堅信を受けて

中1男子

聖霊を授かるということに対して、実際にはピンとこなかったのが正直な感想です。でも、大塚司教様や事前の勉強会で神父様やシスター、菅原助祭から話していただいた「これからは、キリスト者としてその生き方を持って、世の中へ派遣されていくのです。」という内容を緊張を持って受け止めました。

聖書の中に「ともしび」について書かれた箇所がありますが、僕がこれから心が弱いながらも、自分の中の神さまに対しての思いを灯し続けることで、派遣されることが出来るのかなと思いました。自分の中の弱い部分や、ずるい部分に目をそらすことなく、きちんと見つめて乗り越えていけるようなそんな風になりたいと思いました。

お仕事で忙しいのに、僕のために代父になって

くださった森田さんにあらためて御礼を言いたいと思います。ありがとうございました。クラブや学校の行事で、あまり教会に行けないこともありますが、これからは、すすんで自分にできることを教会のため、神さまのため、みんなのためにしていきたいと思います。



中2女子

私は6月に堅信を受けました。そのことで信者としての自覚ができたと感じています。私は比較的小さい頃から教会や小学校でイエス様の教えを聞いていたので、それが特別なこととは思いませんでした。しかし大きくなると、友達の中でも信者が少ないことに気付いて、周りとの差に違和感を覚えるようになりました。信者であろうがなかろうが関係ないと理屈ではわかっていても、なんとなく理解しきれないままでした。

それが堅信のための勉強をしていてシスターや神父様のお話を聞くとしっかりわかってきました。自分が変なのでも、周りを変なのでもない結論を出せて重い荷がおりたようでした。

司教様は、堅信は成人式のようなものだとおっしゃいました。私もそれくらいの緊張をもって堅信式に行きました。

これからは一人前のイエス様の弟子として自覚をもって生活していければ良いと思います。



京都教区高校生会濟州体験学習に参加して

Y.M

7月25日から30日にかけて、濟州島に高校生会で参加しました。

始めの3日間はホームステイ。ホームステイ先の方はとても明るい方で、さらにラッキーなことに、日本語ペラペラの方でした。初日に焼肉店に連れて行ってもらったりと、ほんとに至れり尽くせりでした。感謝です。

また、2日目に濟州教区司教のカン・ウイル司教様を訪問することに。なんとなんと、カン司教様も日本語がペラペラ。日本語を話せる韓国人の方って多いとわかりました。私たちからは、中高生会でどのような活動をしているのかをご説明しました。京都教区に青年センターという組織はあるものの、小教区単位で見ると、やっぱり活動はあんまり盛んじゃないみたい。また、カン司教様は私たちの質問にお答えくださいました。プレゼントに、1連のロザリオを私たちにくださいました。今でも大事に持っています。

ホームステイが終了した後は、現地のカトリック青年たちの合宿に参加しました。テーマは「世界を愛する青年たち」。班分けを見ると、日本のメンバーは全員別々に。ほかのメンバーと話が通じるのか少し不安の中合宿スタート。でも、シボジョ（韓国語で15班という意味）のリーダーが英語でちゃんと説明してくれました。リーダーをはじめとして、みんなと片言の英語ではありましたが、仲良く話すことができました。

2日目のミサ（カン司教様御司式です）では、奉納の役まで頂いて、幸せの限りでした。友達が多くなった3日目、名残惜しくもお別れのとき…。少し寂しくもありました。みんなが、京都

すが、想定していた以上に皆さんに「参加してよかった」と言っていただき、ほっとしています。来年は北白川教会で行われることが先日のブロック会議で正式に決定となりました。当番教会として、ぜひ多くの方に参加いただき、聖体大会を盛り上げていくことができると願っております。

第33回京都南部地区ウォーカソン

ウォーカソン実行委員会 H.M

天候に恵まれたけれど寒かった11月3日、第33回ウォーカソンが約700人が参加して河原町教会を元気よく出発し、鴨川の河川敷を北山橋をめざして歩き出しました。毎年北白川教会は最終の第4ポイント（加茂大橋）を担当し、参加証にスタンプを押しています。今年も子ども達とお父さん、お母さんは一緒にウォーキングに参加。大人はポイントでスタンプ押しをいたしました。参加できない人はスポンサーとなり、ウォーカソンを支援しました。

ウォーカソンは参加する人やスポンサーから頂いた募金を、援助を必要とする国や地区の団体に寄付いたします。今年は東日本大震災「大船渡支援」とアフリカの「ムリンディ・ジャパンプロジェクト」に送られます。迷子や事故もなく無事終了いたしました。ご参加の皆さん、スポンサーの皆さん。お手伝いの方、有り難うございました。



典礼部だより Vol.2

私たちはキリスト者として歩む中で、感謝と讃美の祈りを捧げつつ心に大きな神の恵みを頂いています。その中で、習慣化されている信者特有の所作やその意味、由来や歴史に対して、意外に知らないことがあります。

今一度、キリスト者として知識を深め、私たちの信仰生活をより豊かなものにしていきましょう。第2回は「十字架のしるし」です。

※カトリック大辞典より引用

「十字架のしるし」

キリスト教の典礼で行われる動作の代表的なもの。自分で行う場合と、他者や事物に対して行う場合がある。十字架のしるしそのものは、それが神のものであることを示す。「封印・証印」の意味もあり、人や事物に対して行う十字架のしるしは最も典型的な祝福のしるしである。

十字架のしるしが典礼儀式の中で使われる仕方は多様で、主に、(1) 司式者が求道者や洗礼志願者に対して行う十字架のしるしや、事物の祝福として行う十字架のしるしと、(2) キリス

ト者が自らの身体をもって表す十字架のしるしがある。ミサの初めの挨拶や終わりの派遣の祝福の際に、司式者が会衆に対して、手を伸ばして、大きく十字のしるしをする動作は神の大なる祝福のしるしとなる。個人では祈りの際に定着している、十字架のしるしは、「父と子と聖霊の御名によって」と唱えるが、これも中世初期からつけられたもので、洗礼の想起、さらにはアレイオス派に対抗する信仰宣言の意味もあったと考えられている。十字架のしるしを三位一体の象徴と考える見方も、アレイオス派に対する論争から生まれたもので、おそらくこの影響のもとで、親指と人差し指、中指を合わせて額、胸、両肩に行く慣習が東方教会で始まり、西方にも伝わる。13世紀までは西方でも東方と同じく、右肩、左肩の順序でしるしをしたが、14世紀以降、西方では額、胸、左肩、右肩の順序になり、今日に至る。

ミサの聖堂に入る際に、聖水をつけて自分に行う十字架のしるしは、受けた洗礼を思い起こす意味で慣習化した。このほか、ミサの福音朗読前に額、口、胸へとする小さな十字架のしるしや*教会の祈りにおける初めの祈りの前に口だけに十字架を記す動作も、西方教会における祈りに際しての慣習として広まった。

《十字架のしるしをすること》求道期の初めの入門式で、額に十字架のしるしをすることは早くから行われ、3世紀初めの、テルトゥリアヌス、ローマのヒッポリュトス、オリゲネスが言及している。これは、キリストの救いの力のもとに入り、それによって悪霊を追い払う力にあずかることを意味していた。現在の入信式においても、十字架のしるしをすることは重要な儀式要素になっている。

参考:十字架のしるし(十字架をきる)とは「十字架につけられたイエス・キリスト」を信じます、という意味を表す「信仰宣言」でもあります。この優(易)しく大きな祈りを守り伝えていきましょう。そして、聖堂の入り口で御聖水に指を浸し十字をきる時は、きちんと立ち止り、真っ直ぐ祭壇もしくは御聖櫃の方を向いて十字をきりましょう。

次回はこの御聖水について掲載致します。

参考文献

ミサ(イエスを忘れないために)	ドンボスコ 御受難会司祭 国井健宏
ミサを祝う	オリエンズ
ミサがわかる(仕え合う喜び)	オリエンズ 土屋 吉正
わかりやすいミサと聖体の本	女子パウロ会 白浜 満
神と共にある生活	オリエンズ宗教研究所 御指導 パピルスあい 石井 祥裕

